

## 知の競争時代における大学体育モデルの 再構築に関する実践的研究の概要

### SPERT(Sports & Physical Education Renovation in Tsukuba) プロジェクト

高木英樹

#### I. プロジェクトの背景

社会構造の変化に伴って、大学を取り巻く環境は大きく変わりつつある。たとえば18歳人口の減少に伴う大学全入時代の到来。あるいは、行財政システム・スリム化の一環とされる国立大学の独立法人化。これ以外にも様々な要因が加わり、大学間の競争はますます激化している。さらに大学に求められる役割も従来のマスプロ教育を通じた「均質的で基礎学力に優れた人材の大量供給」から、カリキュラムの実質化による「創造的で即戦力となる人材供給」へと変化しつつある。「知の競争時代」と言われる今日、大学はまさに学生を教育する力（教育力）が問われている。ではその大学教育の中で、教養教育としての体育（大学体育）はどう位置づくべきであろうか？

かつて大学設置基準の大綱化の前夜（1991年頃）、「大学体育」に関しても盛んに議論がなされたが、その本質はいかに職域としての「大学体育」を守るかが焦眉的であった。議論の末、多くの大学で「大学体育」は残ることになったが、15年以上の年月を経て、今日の「知の競争時代」にあって「大学体育」が十分に役割を果たしてきたかは、未だ検証されていない。今後も大学の「教育力」を担うセクションとして「大学体育」が存在し続けるためには、これまでの実績を客観的に評価・総括した

上で、現代のニーズに適合した「大学体育」のモデルを再構築し、その効果を検証する必要があると思われる。

#### II. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、体育センターの全教員が取り組み、4カ年をかけて次の3つの項目について実践的な研究を行うものである。

- 1) 過去における「大学体育」の成果および問題点を総括し、「大学体育」モデルを再構築する際の基礎資料を得る
- 2) 1) の研究成果や先進事例に関する情報をもとに、現代ニーズに合った「大学体育」の基本理念の再構築に取り組み、カリキュラムの作成を行う
- 4) 再構築されたモデルに基づく「大学体育」の新カリキュラムに関して、その実践および客観的な証拠（エビデンス）による検証を行う

#### III. プロジェクトの研究組織と取組

本プロジェクトでは、3つの目的を達成するために、以下の3つの研究グループを編成し、相互に連携を図るためにコア会議を設け、円滑な研究推進を図る（図1参照）。

**G1：過去の総括（リーダー：金谷、松田）**  
過去の「大学体育」を総括するために、「大学体育」全般に関する刊行物や筑波大学体

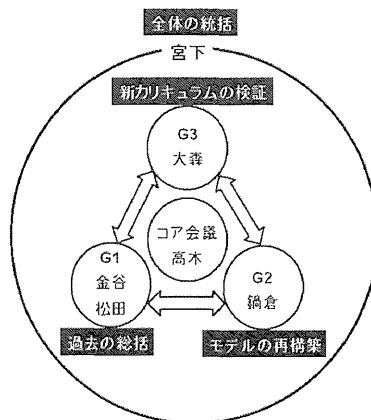


図1. 研究組織図

育センターが作成した研究資料に基づいて文献研究を進めると同時に、これまで筑波大学の「大学体育」深くかかわってきた人物へのインタビュー調査を実施し、時代背景や社会情勢と関連して「大学体育」の理念やカリキュラムがどう変遷してきたかを明らかにする。

さらに、筑波大学の卒業生を対象として、自分が受講した「大学体育」授業に関する調査を行い、これまでの「大学体育」の成果や問題点を総括する。

#### G2：モデルの再構築（リーダー：鍋倉）

「大学教育における身体的教養」、「生涯スポーツの獲得」、「健康の維持増進の手段」などの枠組みの中で、「大学体育」がどのように位置づき、そこに求められる理念は何であるのかを明らかにするために、様々な文献や先進的な取組事例をもとにディスカッションすることで、現代ニーズにマッチした（あるいはあえて現代にそぐわない）「大学体育」のあるべき姿を提示する。さらに、その「大学体育」のあるべき姿を具現化するためのカリキュラムの作成に取り組み、学外の「大学体育」関係者へも提示する。

#### G3：新カリキュラムの検証（リーダー：大森）

再構築されたモデルに基づく新カリキュラムを実施し、その効果を客観的な証拠（エビデンス）に基づき評価するための評価方法の開発に取り組む。開発に当たっては、教科教育学や運動生理学、運動心理学、バイオメカニクスなど様々な研究領域の知見をもとに、これまでと違った観点から「大学体育」の評価を実施する。

#### IV. プロジェクトで期待される成果

これまでも「大学体育」の授業内容に関する授業評価等は、数多く報告されてきている。しかしながら、卒業後の人生の中で「大学体育」がどのように位置付けられ、影響を及ぼしたかを追跡調査した報告などはほとんど見られない。多くの大学では「生涯体育」を教育目標に掲げて授業を展開しているが、実際に生涯にわたってスポーツの楽しさを享受し続けているか否かについて、実際に検証する必要があるにもかかわらず、これまで行われてこなかった。さらに多くの大学では、「大学体育」の授業評価に関しては、「概ね良好」とする結果が見られる。しかし卒業後、何年か経過した

後に客観的な視座から「大学体育」を再評価しようとする試みは前例がない。これは長い目でみた「大学体育」の教育力を判定しようという試みであり、「大学体育」関係者全員にとっても大変意義深く、現場サイドで見落としがちな観点の掘り起しに大変有用である。また1990年代前半、大学設置基準大綱化が議論された際、「大学体育」の存続をかけた理論武装の一環として「大学体育」の理念について議論されたが、15年の歳月を経て、現代的ニーズとのずれが生じ、「大学体育」の理念そのものも再検討を要する時期にきていると思われる。よって本プロジェクトにおいて過去の「大学体育」の総括を行い、その結果を踏まえ

て新しい「大学体育」の枠組み作りに取り組むことは現代的急務であり、歴史的な意義を有するものと思われる。

さらに過去の総括をもとに、新たな「大学体育」のカリキュラムを作成し、学内外に示すことは筑波大学体育センターのプレゼンスを高めるために大いに貢献するものと思われる。加えて、ただ新カリキュラムを実践するだけに留まらず、その効果を客観的な視点から評価し、証拠（エビデンス）として提示できれば、筑波大学内における体育センターの存在意義に留まらず、大学教育全体における「大学体育」の位置づけを向上させるために有益と考えられる。